



Title	日本語のリズム及びリズム単位に関する基礎的考察とその応用：無意味語による調査と「日本語話し言葉コーパス」を利用して
Author(s)	尹，英和
Citation	大阪大学，2008，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49385
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【13】

氏 名	ユン	ヨン	フア
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)		
学 位 記 番 号	第 2 2 4 3 6 号		
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 9 月 25 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
	文学研究科文化表現論専攻		
学 位 論 文 名	日本語のリズム及びリズム単位に関する基礎的考察とその応用—無意味語による調査と「日本語話し言葉コーパス」を利用して—		
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 土 岐 哲 (副査) 教 授 真 田 信 治 准教授 石 井 正 彦		

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は言語のリズム、とりわけ日本語の話し言葉によるリズムについて研究したものである。全体が 4 部、8 章で構成され、400 字詰原稿用紙換算では約 450 枚分となる。

第 1 部は、研究の前提編である。1 章は研究の目的に触れ、調査及び論文全体の構成を述べる。2 章では、リズム及びリズム単位に関する先行研究について紹介している。第 2 部では、日本語リズムの特徴を把握するため、韓国語を母語とする日本語学習者の発話と日本語母語話者の発話双方について特徴の比較を行った。その調査では、発話の持続時間に影響しうる諸要素をコントロールして観るため、3～5 拍分の「無意味語」も使用した。3 章では「発話調査」及び「聴覚調査」の概要を説明し、データの内容と計測方法について詳述している。学習者と母語話者双方の計測結果については、発話速度の差異にも考慮し、語全体の持続時間に対するリズム単位別の比率(%)により比較している。「聴覚調査」では、学習者による調査語の発話が複数の日本語母語話者にどう聞こえたかを見ている。また、学習者の発話意図と母語話者の聴覚判断との一致度にも

着目するなど慎重を期した。4 章では、「聴覚調査」の結果から、各学習者には発話しやすいリズムパターンが存在することを発見した。4 種の特殊拍(長音・促音・撥音・/ai//oi//ui/の別に調べることで、学習者にとって習得困難な特殊拍の順位を示し、更に、日本語母語話者の特殊拍の知覚には、学習者の発話におけるピッチの振舞いが関与している可能性にも注目する。5 章では、日本語学習者と日本語母語話者で行った「発話調査」の結果をリズムパターン別に観察し、単独の「短音節」で始まるものの方が「長音節」で始まるものより持続時間が長いこと(「ヨカン」>「ヨーカン」)などを実証的に示している。リズム単位別の「比率の差の検定」を行うと、おおそ聴覚判断と一致する結果になることから、これらは、学習者の誤発音の判断の要因に促音及び長音のような要素が聞こえるとされる場合にも関連すると説く。伝統的教育現場での、ゆっくりとした発音で、各々の音節を強調するかのように話す学習者や一部の教師の日本語には、特殊で異なるリズムパターンが実現され、それがコミュニケーション上の障害となる可能性も少なくないことから、従来殆ど省みられることのなかった「学習者に対するリズム(持続時間の制御)指導」の必要を示唆する。第 3 部は、母語話者の自発発話からなる『日本語話し言葉コーパス(CS J)』を利用し、リズムパタンの側面から検索して得た結果の説明である。6 章では、この CS J から調査対象の 3-5 拍の名詞を抽出し、「2 モーラフット」のリズム単位で構成されたリズムパタンの出現頻度の順位と「国立国語研究所」が『日本語教育のための基本語彙調査』で選定した「基本語二千」から抽出した語のリズムパターン出現頻度の順位を比較した結果の一致について報告する。また、4 章の平均正発音率をリズムパターン別に並べた順位と比較した結果から、リズム教育においては、優先すべきリズムパターンで出現頻度が高いものがある一方、その逆のパターンがあることを具体的に述べている。更に、リズムパターン別にみた学習者音声に対する聴覚調査の結果(4 章)を、「CS J」によるリズムパタンの分布及び「CS J」で見られる母語話者のリズムの特徴とを合わせて考察している。7 章では『日本語話し言葉コーパス(CS J)』の中から発話者の意図と実際の発話にずれが生じたデータを集め、それらの側面からも日本語のリズム及びリズム単位の特徴を検証する。また、本研究では、当初から「2 モーラフット」というリズム単位の教育への応用の可能性を探ることを目的として調査を実施して来たが、母語話者による自発発話の資料を使用する中で「2 モーラフット」を基本単位とするリズム・リズム単位の妥当性の確かさについての裏づけも実現させている。むすびとしての第 4 部 8 章では、以上の調査及び検索を通して調べた日本語のリズム及びリズム単位の特徴、リズムパタンの出現頻度の特徴、特殊拍の習得の順位等を活用したリズムの教授案について述べた上で、残された課題についても説明し、締めくくっている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文では「2 モーラフット」を基本単位とした日本語リズムの音声実現には、どのような特徴があるかについて、発音・聴覚印象等さまざまな側面から丹念に調べ上げた。ある一定の基準で語を区切り、その時間構造の配置が重要な役割を果たす日本語について、基本的にモーラを単位として獲得してきた母語話者と音節を単位として獲得してきた学習者との間には、実際どのような類似点や相違点があるかを調べ、日本語のリズム教育への応用の可能性を模索することを目指したのである。従来の先行研究では英語や中国語を母語とする学習者を対象にしているが、韓国語を母語とする学習者の発話との間で本格的に比較を行ったものとしては、初めての研究である。また、日本語独自のリ

ズムの生成に重要な役割を果たす特殊拍(長音・促音・撥音・二連母音イ)は、従来個別の音韻として扱われることが多かったが、これらを包括的に扱うことにより、その習得順序や特殊拍の実現自体の自立性についても一定の解明を見た点は見落とせない功績である。このように、当該テーマによる研究を具体的に前へ推し進めることができたところに大きな価値が認められる。母語話者による自発発話のデータベースである「日本語話し言葉コーパス」も扱うことで、有意味語によるリズムパタンの分布の特徴を調べることができた点も評価できる。母語話者の多量な自発発話資料を用いて「2 モーラフット」を基本単位とするリズム・リズム単位の妥当性について解明したことについても意義が認められる。しかしまた、今後も考えるべき問題がないとは言えない。本論文では母語を別にする者同士の特徴を明らかにするために、平均値を用いたが、学習者の場合、個人差が目立つ場合もあった。母語の転移として予想される学習者全体の特徴を調べることの他に、学習者の個人差にも着目した、探索的データ解析を行った方がよい面もあるだろう。学習者音声に対する聴覚調査の結果を、母語話者の自発発話である「C S J」と比較している点はどうであろうか。学習者の「発話調査」では無意味語による読み上げ調査を行っているため、それ自体の資料の自発性は低く、整合性に検討の余地も残されよう。母語話者の自発発話である「C S J」とは発話スタイルに差があるから、日本語リズムの実際の特徴をより明確にするためには、学習者の発話にも自発発話を利用する必要があるだろう。また、「C S J」では日本語母語話者の音韻フィルターによる表記を行っているが、とくに学習者音声との比較でコーパスの大量データを扱う場合は、より慎重な確認手続きも必要となろう。しかし、これらのことが本論文の根本的価値を損なうことはない。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものであると認定する。